

小 札 考

—ユーラシアからみた小札鎧の系譜—

梶 原 洋

On lamellae

: Lamellar armor from a Eurasian viewpoint

KAJIWARA Hiroshi

キーワード : 小札 ユーラシア 型式分類 大鎧 アイヌ鎧

要旨

小札は、アッシリアに始まり、内陸アジアを通じて東西に広がった。本論では、ユーラシアに分布する小札について、アルファベットや記号、数字を用いて簡単に小札の緘孔、綴孔などの配置を表現し、それに基づいてA-Hの型式分類と細分を行った。小札鎧は、ユーラシア全体の分布をみると、内陸アジアを中心に西はヨーロッパから東は日本まで分布している(表1)。編年的には、5-6世紀を中心に古くは紀元前から新しくは19世紀まで用いられたことが分かる(表2)。日本列島における小札鎧もユーラシアに広範に分布する小札鎧文化伝統の最東端に位置するものである。鎧文化における大陸との関係は、古代ばかりでなく中世もしくは近世にまで続き、大鎧の成立や北海道、樺太のアイヌ民族の鎧の存在にも大きな影響を与えたことが考えられる。

Abstract

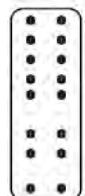
Lamellar armor, constructed of hundreds of small rectangular lamellae of wood, hide, bone, antler, bronze, or iron, has been widely used across Eurasia, from Europe to Japan. Rectangular lamellae with holes for lacing one to another with straps or cords first appeared in Assyria in the eighth or seventh century B.C., then spread through central Asia to Siberia, Mongolia, China, Korea and finally Japan in the fifth century A.D.

According to the alignment of pierced holes for binding, I have classified lamellae into eight types (A-H), and subdivided these by details of the arrangement and number of holes. In the notation system I have developed, the arrangement of holes is represented by a combination of letters, marks and numbers. Holes in the center row are indicated by capital letters (A, B, C). Holes on both sides are represented with lower case letters (a, b, c). Binding holes at the lower end of the lamellae are specially designated with “@” and assigned numbers (@, @2, @3, depending on the number of holes). Bosses on lamellae are depicted with “⊕”. If vertical spacing between holes is wide, this is indicated with a hyphen. Lamellar type B-2, shown on the right, is represented with “ABabC-cdD@”. Overall distribution and chronology of lamellar types are illustrated in Tables 1 and 2.



Lamellar types B-1 and B-2 were most ubiquitous in Eurasia from the third to thirteenth centuries A.D. Only in Tibet were these types still produced through the nineteenth and even twentieth centuries. As a rule, types A-D were distributed almost everywhere in Eurasia, while type E was mostly used in North East China and the Far East.

From the late Kofun period until around the beginning of the Heian era, the lamellar armor of Japan commonly was of types B1 or B-2—similar to the armor of Eurasian nomadic warriors and indicating a similar level of lacing technology. Type B lamellae, with holes in the center row, may have evolved, over the years, into type E lamellae, with holes at both sides. Type E-2 lamellae (abcdefg@2 shown on the right), unearthed at Akita Castle and dated to the ninth century, were also discovered at eighth to twelfth century sites in Northeast China and the Maritime region of Russia. This indicates that connections with the continent may not have been completely ended, even during Japan's medieval period.



With regard to the development of Oyoroi armor, the appearance, as late as the eleventh century, of Namifuda lamella (type H-1, a/2bcdef@2 shown on the right), with 13 holes arrayed in double vertical rows, is the most vivid example of the Oyoroi. The lamellae found at Akita Castle, with an even number of holes in double rows, might have evolved, through the Heian period, to the Namifuda, best fit for the oblique lacing technique called Nawamedori, though no record of this was preserved in the historical record. The various kinds of lamellar armor found among the people of North Asia, including the Ainu, show that routes of exchange and trade extended to Central Asia.



はじめに

「小札」は、札あるいは甲札¹⁾とも呼ばれ、鎧(甲冑)を構成する主要な部品である。木・革・骨・青銅・鉄などで作られた板状の小札に開けられた孔を紐・布・革などで隣合わせに綴って帯状にし、さらに上下に結縛して作られた鎧について、その構成する小札を指す言葉として一般的に「小札」が使われている²⁾。この小札で作られた鎧は、東アジアだけではなくユーラシア全体に広く分布しており、主要な鎧の形式の一つとなっている。日本には、弥生時代の木製甲、古代の短甲と挂甲、古代末期あるいは中世初期からの大鎧、胴丸、腹巻、中世後期から近世にかけての当世具足といった変遷があり、世界的にもよく知られた美術的に評価の高い鎧³⁾の文化がある。

小札は、日本では古墳出土のいわゆる短甲の一部や挂甲⁴⁾、さらに奈良時代の挂甲にも広く使われていたことが発掘資料や伝世品から知られる。また、平安後期からの伝世資料がある大鎧も基本的に小札を緘して作られている。これらのことは、美術史(例えば山上1941、尾崎1968、同1970、笹間1973など)、有職故実(鈴木1949、同1996、近藤2000など)、考古学(末永1943、同1944、同1971、末永・伊東1974など)などの諸先学が考察を重ねてきたところでもある。

したがって、この小論では、鎧自体の構造や日本での変遷についてではなく、小札、とくに楕円長方形、長方形の小札に焦点をあて、ユーラシア全体の中で、どのように変遷、分布し、また、そのなかで日本の古代から中世初期の小札がどのような位置づけにあるのか明らかにすることを目的とした。

1. ユーラシアの小札

(1) 概観

ユーラシア全体を見渡した小札の研究は、筆者の管見では見当たらないが、鎧研究の中で小札に対する言及や分析がなされている。1895年のハウによるアメリカインディアンの鎧の研究では、新大陸だけでなく内陸アジア、中国、極東の資料に触れられており、それとの関係でアメリカインディアン鎧の成立が説かれた(Hough1895)。

代表的な文献としては、ラウファーによる先駆的な労作がある。『中国の陶俑、第一部 序説 防護鎧の歴史』の主体は、

中国の史書、絵画、武人陶俑に基づいた鎧の考察だが、その中で、裏地に小札を縫いつけたものを Scale armor とし、長方形の小札を横に緘して帯とし、それを縦に緘す形式を小札鎧、Plate armor と呼び、遊牧民の発明にかかるものとして、ユーラシア全体から考察が加えられている(Laufer1914; 258-291)。また、北東アジアに見られる鎧を日本の影響と考へた(前掲; 260)。骨製鎧については、中国の史書を参考にして、肅慎、挹婁などの沿海州付近の民族によるとしている(前掲; 262-263)。

ストーンによる武器と甲冑に関する用語辞典は、項目ごとの解説だがヨーロッパ、中東、インドから中国、極東、北東アジアまでのユーラシア、さらにアメリカの多様な甲冑について49ページを割いた詳しい解説がある(Stone1934)。

ソードマンは、1361年の戦いによるスウェーデンのゴトランド島にあるウイスビー遺跡の調査報告書の中で、特に鎧について詳細な分析を加えた。その中には小札鎧が多く含まれており、ヨーロッパだけでなくユーラシア全体の資料との比較検討を行った(Thordeman1939)。特に第七章を「小札鎧の歴史」と題して、245-284ページにわたり詳しく論じている。また、第八章も「板札によるコート鎧の歴史」と題されているが(前掲; 285-328)、この中にはモンゴルやそれ以後の中国、朝鮮半島の小札を生地の表裏いずれかに縫いつける形式の鎧も取り上げられている。「小札鎧の歴史」では、まず小札鎧が①アジア起源のものであること、②アラスカや東シベリアの骨製小札、内陸アジア、日本、ペルシアの皮製小札、チベットの鉄小札があることを述べ、スウェーデンのビルカ、イタリア、ハンガリー、クリミア、西シベリア、イラン、トルファン、カラホト、トルキスタン、ニヤ、エスチングル、チベット、チュクチ、東モンゴル、日本、キプロス、エジプトからの小札が図示され、小札鎧がユーラシア全体に分布していることを明らかにした(前掲; 246-248)。小札については、エスチングル出土の2世紀の小札を最古としている。

ロビンソンによる『東洋の鎧』は、さらに世界史的な甲冑研究で(Robinson1967)、エジプトから極東までの鎧を1. Fabric armour (布甲)、2. Scale armour (魚鱗札甲)、3. Lamellar armour (小札甲)、4. Mail (鎖帷子)、5. Laminated and splint armour (板甲)の5種類に分けている。2と3が小札の鎧にあたる(前掲; 1-14)。ロビンソンによれば、丈のつまった魚

鱗札製の鎧は、アメンホテプⅡ世(B.C. 1436-1411)治世下の墳墓壁画に描かれたものを最古とした。長方形の小札はアッシリアのニネベのレリーフに見られるものを最古とし、その年代は、BC7-8世紀である。この時期のものも小札が下地の布または皮に縫いつけられている。地中海地域では、キプロスのBC7-6世紀の遺跡のものが最古で、中国ではBC1-AD1世紀のモンゴル、エスチンゴル出土の資料を最古としている(前掲;7-8)。また、中国の長方形小札について、内陸アジアの遊牧民からもたらされたというラウファー説を支持した(前掲;130)。ロビンソンが指摘しているように、小札甲は、下に位置する札板(小札帯)が上部の札板の外側に重なり、一方魚鱗甲の場合は、葺き瓦のように下の札板の上部が上の札板の下に潜り込むように内側に重なる(前掲;3-7)。日本についても古墳時代から近世まで、一章を割いていて(前掲;167-215)、挂甲から大鎧までの小札の素材、絨毛、漆の塗彩などについて図とともに詳説した(前掲;174-175)。

内陸アジアの遊牧民は、『史記』「匈奴列伝」に「士は皆力強く弓を引くことができ、すべて甲冑をつけて騎士となる」と書かれたように鎧をまとう馬上の戦士であった(内田・田村他1971;3)。また、モンゴルの兵士についてドーソンは、「皆乗馬して戦えばなり。身軀を防ぐには革甲を以てし、弓を以て主要なる武器となせり」と記述した(ドーソン1936;64)。その甲冑と小札について、ゴレリークの「初期モンゴルの鎧(9世紀-14世紀前半)」に詳細な論述がある(Gorelik1987)。特に契丹の鎧について絵画史料から分析を試み、モンゴル帝国以前の内陸アジアの鎧に論及した(図1-1、前掲;165-168)。契丹の兵士の姿は、内陸アジア、極東に広く分布したコート式の小札鎧の着用を見事に示している。さらにゴレリークは、『古代東方の武具』(Gorelik1993)をまとめ、小札鎧、魚鱗甲についてもエジプト、アッシリア、スキタイ、内陸アジア、中国と網羅的に資料を集め論じた。それぞれの起源はロビンソンの主張と同じくエジプトやアッシリアだが、スキタイの青銅魚鱗甲(BC5-6世紀から)、カフカスの青銅小札鎧(紀元前二千年紀後半から一千年紀前半)、ウラルトウの鉄製小札鎧(BC7-8世紀)などの年代からみて、内陸アジアが古く東に行くに従い年代が若くなる(前掲;80-138、図版L-LVI, 316-329)。フジャコーフとソロヴィヨフは、北アジア、内陸アジアの小札について、連結の仕方、形などによって細分し、

6-18世紀に至る変遷を概述した(Khudjakov and Solov'ev1981)。マトヴェーエワ、ポチョムキナ、ソロヴィヨフは西シベリアの遊牧民のヤゼボ・クルガン出土のBC2-3世紀の鹿角製小札鎧について紹介し、同様の骨製、角製の小札が内陸アジアから中国の甘肅、青海、内蒙古、北東シベリア、沿海州に広がっていることを指摘した(Matveyeva et al. 2004)。この事実は、青銅や鉄が出現する以前、内陸アジアの遊牧民の間で広く骨、鹿角などによる鎧が用いられていたことを示している。また、その延長線上の北東アジアでも、近世まで海獣の牙、骨、マンモスの牙などで作られた小札鎧を用いていたことが知られている。内陸アジアの古代中世のトルコ系民族の鎧についてはガルブーノフが、アルタイを中心にまとめ(Gorbunov2004)、小札の形状と絨孔の構成などから型式分類を行い、その消長を明らかにした。ボブロフとフジャコーフは、15-18世紀前半における内陸アジアと南シベリアの遊牧民の武具をまとめる中で鎧にも触れ、チベットでは、僧院を中心に小札鎧が大量に作られ、モンゴルとの政治的、文化的、宗教的な近さにより、内陸アジアの地域に広範に取引されて分布していたことを明らかにした。また、明代、清代における小札鎧の実態も絵画、彫刻資料から分析を加えた(Bobrov and Khudjakov2008;331-333, 336-339)。

(2) 日本の小札研究

鎧の構造的、美学的研究に比して、小札自体の研究は、近年盛んになったと言ってよい。清水は、奈良県藤ノ木古墳出土挂甲の分析のなかで、小札の絨、綴について考察した(清水1989、1996)。津野は茨城県鹿の子遺跡出土の小札を分析し、古代から中世への鎧の変遷の仮説に新しい見方を示し、これ以後の小札研究の方向を指し示したとよい(津野1995)。また、大鎧の片山形の小札も東アジア全体の絨・綴技法のなかで位置づける方向性を示した。さらに秋田城出土の小札などについて北方系とし、渤海・靺鞨などとの強い関連性を指摘した(津野1998、2000)。高橋は、古墳時代の小札鎧が高句麗などと強い関連をもつと主張した(高橋1995)。服部は、中国東北地方の小札について型式分類し、日本との関連についても考察を加えた(服部2006)。金山は、主に大鎧以後の小札に焦点を当て、発掘資料も丹念に渉猟して『甲冑小札研究ノート』を著し、小札の分析を進めた。大鎧

の小札(並札、四目札、三目札)が、襦褌系、胴丸系の二行の小札から進化したものであるとの見解を示した(金山2006; 47)。大鎧の緘し方からみれば、二行で偶数の孔をもつ四目札(二行14孔)が秋田城などの二行16孔の札と類縁関係にあって、縦取りに適しており、奇数の孔をもつ二行13孔の並札は、斜め上の孔に緘紐が繋がる縄目取の緘に適合した孔構成であることが理解できる。

(3) 中国の小札研究

中国における甲冑研究では、前述のようにラウファーによる甲冑研究(Laufer1914)やロビンソンによるユーラシア東部の甲冑研究(Robinson1967)が今日でもその価値を失っていない。これらの研究では、中国だけではなく、中近東、内陸アジア、北東アジア、極東への目配りもなされている。中国の研究は、秦の始皇帝兵馬俑坑の発見以後、漢代以前の甲冑研究が大きく進展した(張・馬2002)。古代から中世にわたる甲冑研究は、楊により70年代以降精力的になされてきた(楊1980、2007)。ディーンによる唐代以前の中国甲冑の研究もこれらの研究に基づいている(Dien2000)。さらに2000年以降、白・鐘によって代表的な遺跡出土甲冑の構造復元研究がなされ、甲冑の複製が作られた。小札の形態や綴方、緘方についての分析も詳しくなされた(白・鐘2008)。また、劉による歴史上の甲冑を中心とした軍装の研究(劉1996)や陳により編集された、中国歴代甲冑の推定復元図もこれまでの成果を取り入れている(陳他2009)。小札自体については日本の服部啓史が、中国東北地方の古代・中世の小札をまとめ分析を加えている(服部2006)。

楊や白・鐘による中国甲冑変遷を参考にすれば、青銅器時代にあたる夏、商、周の時期は、皮甲が主流で、春秋・戦国時代に鉄器時代に入っても皮甲であり、戦国時代晩期になってようやく鉄甲が増えてくる。しかし、秦代も基本的に皮甲が主であり、兵馬俑によくあらわれている(白・鐘2008;5)。商・周の鎧はわずかで、皮に銅の板を取り付けたものが発見されている。陝西省長安普渡村出土西周の板は、幅30cm、高さ55cmある。青銅甲は、鎧の材料としては、強度と硬度が不足し、皮より重いという欠点があったと考えられる。東周の時期に皮甲は最も発達した。甲片は、「札」と呼ばれ、長方形で、まず横に連結して「排」(札板)を形成し、この一連の「排」は、

列を意味する「旅」と呼ばれる。さらに「旅」の数は「属」で数えられる。この形式の鎧が「札甲」である。東周の「札」は、牛皮、犀皮などを使い、模圧加工法⁵⁾で成型し、表面には漆が塗られ、絹糸で緘されている。代表的なものに湖北省随州の曾公乙墓発見のものがあり、181の小札からなり、5排が連結されている。札の大きさはさまざまだが、縦横とも約10cmである。この後札は次第に小さくなり、東周で5-7旅(属)、始皇帝兵馬俑坑出土のものは10旅以上となる。

さらに大きな変化は、秦代にあらわれた小形の「魚鱗甲片」である。1999年発見の始皇帝陵の石製甲冑は、800片の魚鱗甲片が使われていて、最古の例である(前掲;6)。戦国中・晩期に鉄甲が出現したが、皮甲の影響が大きく、甲片も東周のものに類似する。漢代になると鉄の冶金技術が進歩し、中原では鉄甲に変わる。小型化が一層進み、魚鱗甲片はさらに小さくなる。満城漢墓の甲片は2859片、淄博齊王墓金銀甲片鉄鎧は2244片、西安北郊漢墓鉄甲冑では2857片であり、その大きさは長さ3cm、幅2cmとなる。魚鱗甲は、緘しても極めて柔軟に体に合い、鎧としては極めて高い完成度をもつ。しかし、緘方が複雑で、甲片数も多く、製作技術が高度で手間がかかるという欠点もあり、内陸アジアではあまり用いらなかったのではなかろうか。

漢代では、王墓出土以外の甲も多くは魚鱗甲だが、長方形の小札としては、古いものとしては前漢フフホト十二城子出土の鉄小札がある(楊1980、2007、白・鐘2008)。小札は長11cm、幅3.4cmで、部分的に魚鱗甲片が用いられている。

中国の甲冑は、魚鱗甲、精細魚鱗甲、札甲の三種類が以後も主となる。基本的に魚鱗甲が多く、それに長方形の札甲がともなう。十六国時代の甲冑に見られる長方形小札(例えば北齊鄴南城出土の鉄札)は、王朝の系統からいっても北方の鮮卑族に由来する遊牧民の伝統的な甲冑であると考えられる。この傾向は、隋・唐にも引き継がれ、その出自と塞外民族の強い影響を示すものと考えられる。この時代になると小札甲のほかに、「山文」の鉄片を綴った特殊な鎧や胸部に円形の金属を取り付けた日本の四天王像に見られる「明光鎧」が現れ、形態的にも塞外諸民族のコート状鎧とは異なっている。そのなかに、長方形の小札による鎧も存在する。西安曲江池の鉄小札は、その代表的な資料である(表1)。敦煌などにみられる四天王像の鎧は皮甲と推定される(楊2007;53-54)。

(4) チベットの小札研究

チベットの鎧については、ニューヨークのメトロポリタン美術博物館で開催された『ヒマラヤの戦士たち。チベットの武器と鎧の再発見』展の展示解説が最も詳しいものといえる (LaRocca2006)。鎧の種類には大まかに①小札鎧と②鎖帷子の2形式がある。小札鎧には、さらに a 鉄製のものと b 皮製のものがある。皮製の小札鎧⁶⁾について、ラロッカは次のように解説した (前掲; 124-125) (図1-4)。「皮製の小札鎧東チベット、15-17世紀。皮、セラックニス、金、顔料。平たくおいて、高さ335/8インチ (85.4cm)、幅551/2インチ (141cm)。おそらく南東チベット地域のカムに由来するもので、この鎧はさらに西と東の地域からの影響の独特な組み合わせになっている。この小札の形と大きさは、西の中央チベットに付随する古典的な鉄製小札鎧の影響を示している。しかし、素材、装飾、緘のパターンは東の雲南や四川にいるナシ (モソ族) やイ (ロロ族) が身に着けていた皮製の小札鎧の二つの特徴的なスタイルの影響を見せている⁷⁾。皮小札鎧は一般的に18-19世紀に年代づけられているけれども、この資料の放射性炭素年代は1440-1640の年代幅となった⁸⁾。鎧は、小札列が十四段あり、胴体を圍繞する十段の完全な小札列と胸部と背面の上半部両脇を覆う三段の短い列からなる。堅い皮でできた大形の板が背面上半の最上部につけられていて、平らな底面と二葉形の上縁部を持つ。胴部の完全列二段目の小札は、鉄製小札鎧でそうなっているように、すこし外反している。小札は堅くて光る暗赤色の表面をしていて、おそらくは本当の漆というよりはセラックニスもしくはニスのようなものからできているのであろうが、赤金色の花と葉のデザインで飾られている。小札は、5から11の緘孔があり、数は場所によって異なる。小札の大きさは、平均長さ8-8.2cm、幅2.2-3.2cmで、一貫して幅広ではあるが、より後代のものと思われる鉄製の小札と似ている (カタログナンバー4から6を比較せよ)。それぞれの段の小札の多くは中心に向かって重複しているが、あとからの小札の修復、取替え、緘替えによりいくつかの合わないところがある。緘のパターンは、鉄小札の鎧に見られるものとは主に段をつなぐ緘糸が一つの段の小札の最上部から垂直にその下の段の小札の最上部をつないでいることで、緘糸の大部分がむき出しのままであることが異なる。これは、ナシ族とイ族の鎧両方で使われている

方法である。しかし、ナシ族やイ族の鎧と違って、一ナシ族やイ族の場合には縦の緘糸が隣り合っている—この例の場合には隣り合った三つの緘糸の五グループにだけ表れ、そのグループの間に四つの広く開いた縦糸を伴っている。加えて、背面最上部の大きな皮板は、イ族の鎧にのみ見られるその他の特徴である」。この緘方は、ソードマンによって図示されたものと一緒であろう (Thordeman1939; 254-255)。同様の鎧は、四川省の民俗大学博物館所蔵羌族皮鎧、ドレスデンの民族学博物館、ロンドン塔の王立鎧博物館などにも所蔵⁹⁾されている (Song, Gao and others2004; 715, Thordeman1936; 253, British Museum1910; fig.239-240)。ラロッカも前述しているように四川省の羌族やチベットのカム地方に住むチベット人の製作にかかるものであろう。その小札孔型式はAabcd@である。

鉄甲は、ソードマン、ロビンソン、ラロッカ、ボブロフ、フジャコーフらが指摘しているように古代の小札鎧そのままの形を残している。しかも18世紀あるいはそれ以後まで作り続けられていた (Bobrov and Khudjakov2008; 336)。ソードマンはこの種類の鉄札の緘方を図示している (Thordeman1939; fig.236-238)。ラロッカの図版に見られる鉄札の鎧にも同様の緘方がみられる (LaRocca2006; 51-66図版, 表紙裏写真)。

(5) 極東・沿海州、北海道、韓半島の小札研究

アムール流域の地域の小札は、デレビャンコによりまとめられた (Derevianko1987)。BC6-4世紀のアムール流域の初期鉄器時代、ポリツェ文化に小札鎧が出現するが、その初期には骨製の小札もみられる (前掲; plateVI)。これは、鳥居がかつて述べ前述のマトヴェエワやゴレリークが指摘するようにユーラシアの遊牧民に紀元前から存在する鹿角製、骨製小札甲と一連のものであろう (鳥居1925; 315-316)。中国の三国志魏書や晋書には陳留王景元三年 (262年) の肅慎の貢物として以下の記事がある。この「肅慎国遣使 中略 石弩三百枚、皮骨鉄鎧二十領」 (Chen Shou・陳寿1982; 149 下線筆者) や「有石弩、皮骨之甲、檀弓三尺五寸、楛矢長尺有咫」 (井上他1974; 72) という記述は、現在の極東・沿海州の地域の民族 (中国の史書では肅慎や挹婁) が皮・骨の甲も使用していたことを明瞭に示している (末永・伊東1974; 109)。ソ

ウル夢村土城から発見された百済初期の骨製小札鎧もこの系列に属すると考えられる (Kim, Jung and Lee 1987)。また、チュクチ族の骨製小札 (図1-2, 3) (Laufer1914; 262-263、Thordeman1939; 263) やエスキモーの骨製、セイウチの牙製小札もこれに類するものである (図1-5) (Hough1893; plate II, 692-694)。デレビャンコのまとめた沿海州のポリツェ文化期の骨製小札は小札孔が少なく、型式は明瞭ではない。また、ポリツェ文化には、鉄製小札もあり、中国漢代の魚鱗甲札に類似する。靺鞨、女真の時期には、2行14孔+下搦孔をもつ長方形の小札など何種類かの小札甲の断片が発見されている (Derevianko1987; table VI, VII, VIII, XV, XXV、Shavkunov 1993; fig. 43-47)。

北海道では、柴浜遺跡からオホーツク文化に属する鉄製の小札が2点出土しており、大陸の同仁・靺鞨文化に相当する (菊池1995; 229)。津野は、シャイギンスコエの小札と同じタイプとしている (津野1998; 163)。アイヌ鎧¹⁰⁾については末永・伊東の詳しい研究がある (末永・伊東1974)。それによれば、新井白石による『蝦夷志』に「ハヨクヘ」、林子平の『三国通覧図説』には「ヨケベイ」 (図1-6)、村上島之允の『蝦夷嶋奇観』には「アヨッベ」と記される (新井1720 (1979; 48)、林1785 (1927)、村上1800) が、図示された鎧はいずれも挂甲の形式である。また、江戸初期の宣教師、ジェロニモ・ド・アンジェリス第二蝦夷報告1621年では、アイヌの鎧は鉄製ではなく小札による粗雑なものであると記録されている (チースリク訳1962; p.94とポルトガル語原文 p.34)。最も重要な資料である伊東信雄により1936年、樺太で発見された皮鎧は、アイヌ鎧に関する唯一の実物として詳しい研究がなされ、日本の挂甲との類似性が指摘された (末永・伊東1984)。これについては、4の(2)で私見を披露したい。

アイヌに隣接するニブフ (ギリヤーク、スメレンクル) の鎧については、間宮林蔵の『北蝦夷図説』にスメレンクルの鉄小札製の甲冑ベッチが図示されており (図1-7)、いずれも前合わせのコート型式であると推定される (間宮1979; 217-218)。19世紀末にアムール流域の調査を行ったシュレンクもギリヤークの甲冑ベッチについて解説と図を残している (Schrenck1891; 図版 XLIV)。それによれば「その一つが鉄鎧 (ギリヤーク語で Wytsch-petsch、ウィチ・ベッチ) である。これは、薄く長い鉄小札で、穴が開いており、互いに縫り合

わされた獣皮もしくは魚皮のびっしりと並んだ紐によって穴が結ばれて緘されたものである。これらの鎧の頭部 (図版 XLIV, 図2) は、冑の形をしていた。上述の鉄小札の完全な一片は、内側に曲がっていて、紐により結縛されており、この下の縁から頸部の防御のために下に特定の一部分が吊り下げられている」と記されている (図1-8) (前掲; 572-573)。

韓半島の小札については、まとまった研究は見られないが、表2のように、高句麗の資料として吉林省集安の高句麗古墳の出土資料がある (吉林省文物考古研究所編2009)。末永・伊東は、楽浪漢墓の小札を中心に紹介した (末永・伊東1974)。津野も高句麗と伽耶の小札資料を引用した (津野1998、2000)。また、前述のように百済の夢村土城から長方形の骨製小札が出土している。近年発掘調査により、新羅や李氏朝鮮の16世紀の鎧の発見が伝えられている。正式報告を待ちたい¹¹⁾。

3. 小札の型式分類と分布・編年

(1) 型式分類

小札の分類については、ガルブーンフ、津野、清水、高橋、服部、金山らの研究がある。清水は藤ノ木古墳の分析のなかで、「挂甲の形式学的研究はほとんどされていない」との認識から小札の分類を進め、5つに分類した。さらに綴方、緘方の観点から緘穴1列と2列に大別し、さらにその数により細別した (清水1989; 44-62, 370-375)。高橋は、古墳時代の甲冑を小札綴・小札緘・地板綴の三種類に分け、小札緘系統が北燕や高句麗との強い関係について論じた (高橋1995)。津野は鹿の子遺跡の小札について幅を重視し、それに緘・綴孔の位置関係、下溺孔の有無や札の形状から細分した (津野1995; 56-62)。第三緘穴の有無や第二綴穴の位置の変化を大鎧への変化の一画期とした。また、津野は「古代小札甲の特徴」の中で、東アジアの視点から小札を考察し、奈良時代前半までは、「東アジアの小札と動向をおなじくしていた」が、8世紀後半以降独自性を増すと指摘した (津野1998; 163)。東アジアの小札について1-5類に分類したが、そのなかの1-3類が、長方形の小札である。3類について北方系の小札とし、渤海、靺鞨など大陸の小札との強い関連性を指摘した (津野2000)。服部は、上述の研究をもとにして、綴甲札と

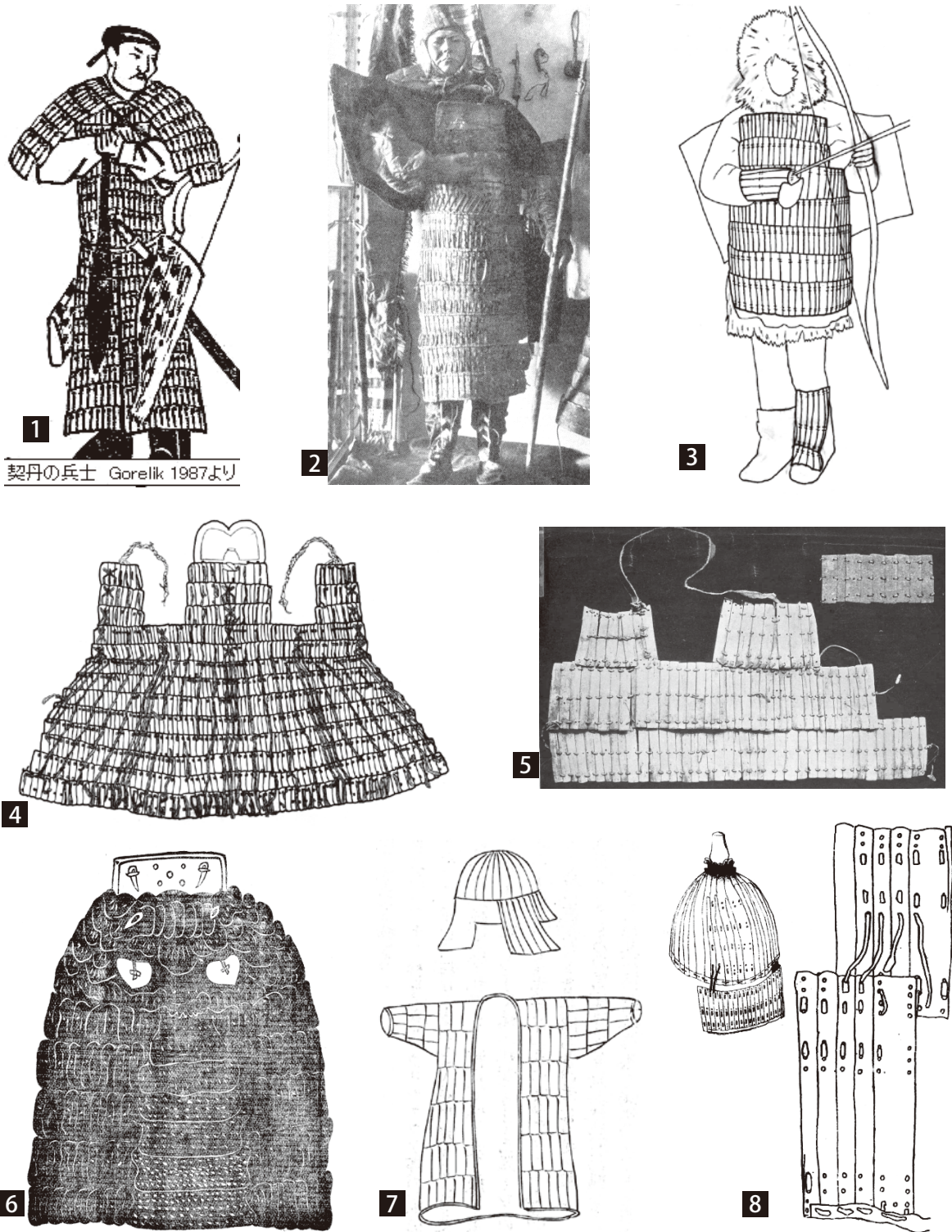


図1 東・北アジアの挂甲式小札鎧 Fig.1 Lamellar Armor in Northeast Asia

1. 契丹の小札鎧 (Gorelik1987; 図2-2より)、2. チュクチの鉄小札鎧、3. チュクチの骨製小札鎧 (Thordeman1939; 図251, 252 (改図)より)、4. チベットの小札鎧 (LaRocca2006; 図版 p.125改図)、5. エスキモーの海獣牙製小札鎧 (Hough1895 上図版2)、6. アイヌのヨケベ (イ) (林『三国通覧図説』図版より)、7. スマレンクル (ニブフ) のベッチ (間宮『北蝦夷図説』 p.218 図版より)、8. ギリヤーク (ニブフ)、ウィチベッチ (Schrenck1891; 図版 XLIV)

緘甲札に分類し、さらの穿孔位置、数、札の形態などから細分している(服部2006;19)。服部も指摘するように綴甲札と緘甲札の分類は、穿孔位置のみでは判断できないのである。縦横の差が余り無いものが綴甲札とされ、縦方向に長いものが緘甲札とされているようである。孔の配置と数だけから見ると、綴甲札Ⅰ式と緘甲札Ⅰ列Ⅰ式の札の中央に孔が無いものは同じであり、緘甲札Ⅰ列Ⅰ式Aと緘甲札Ⅰ列Ⅱ式A、B、緘甲札Ⅰ列Ⅲ式A、C、Dも同様である。金山は小札の形態からa、bに分け、さらに緘孔の位置から(1)(2)に分類し、秋田城の小札のような二行で複数の緘、綴孔をもつ小札が二行で奇数の並札につながると考えている(金山2006;37-47)。

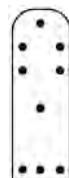
これら先学の小札分類では統一された基準がなく、型式それぞれの名称からただちにその小札の特徴をつかむことが難しい。筆者は、緘甲札と綴甲札の分類の難しさを考え、また、資料が実物ではなく刊行された図によるものであることも考慮して、対象を縦長の小札に限り、その形状(小札の末端が楕円、角など)からではなく、穿孔位置、数、配置を型式分類の出発点にした。また、冗長となる文章での記述ではなく、アルファベット、数字、記号を使い、その並びによって孔の配置がわかるように試みた。まず、小札の上部、中央部の緘孔をアルファベットの大きい文字で表し、上部から順番にABCとする。小札の両端付近に位置する綴孔は、二個一対としてアルファベットの小さい文字で表し、上から順番にabcとする。二個一対の綴穴の上下が著しく離れている場合はハイフン(-)で示す。小札下端の下捌孔に相当する孔は、@で表し、その数により@,@2などとする。小札の内部に突起などをもつ場合にはⓉで示す。また、上下の孔の間が極端に開いている場合には-をいれる。これを実際的小札で示すと右図は、ABabC-cdD@という記号の羅列として表すことができる。これにより、図がなくても小札孔の配置を知ることができ、容易に比較可能となる。この原則に従い小札をA~Hの8タイプに大別し、さらにそれぞれをA-1、A-2というように細別した(表1、表2)。これら分類したものをそれぞれのタイプの空間分布表(表1)と編年表(表2)にまとめた。



(2) 型式の細別

①タイプA 上部の緘孔が一個で、中間部中央にも緘孔がある。

A-1=AabBcd@2~3, A-2=AabBcdC@
A-3=AabCcdef@2, A-4=AabB-@2



②タイプB 上部中央の緘孔が縦に2個あり、中央に1個もしくは2個の緘孔をもつ。

B-1=ABabC@2, B-2=ABabCcd@2~3
B-3=ABabCcdCD@1~2, B-4=ABabCc@2
B-5=ABabCabc@2, B-6=ABabCDcd@
B-7=ABabCDcdE@2



③タイプC タイプBに突起Ⓣの付いたもの。

C-1=ABab Ⓣ Ccd@, C-2=AB Ⓣ Ccd@2



④タイプD タイプBに類似するが、中央の緘孔がないもの。これは清水が指摘するように草摺の小札の可能性もある(清水1989;373)。

D-1=ABab-cd@1~3, D-2=ABabcdC@2
D-3=ABab-c@2, D-4=ABab@1~2
D-5=ABabC@



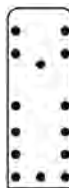
⑤タイプE 緘孔、綴孔が全て2個一対で小札の両端に位置する。小札孔のまとまりが著しく離れている場合は間にハイフン(-)を入れる。

E-1=abc-de@2 E-2=abcde-fg@1~3
E-3=abcde@fgh@2, E-4=ab-cd@2~3
E-5=abcd-e-fg@2, E-6=ab-cde@2~3



⑥タイプF タイプEの中央に緘孔が1個付くもの。

F-1=abAcde@3



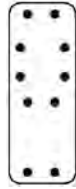
⑦タイプ G 上部中軸の緘孔が2個一対のもの

(A2のように表す)。

G-1=A2abB2-@2, G-2=A2abB2cdef@2

G-3=A2abBcdC@2, G-4=A2B2abcdefC2@2

G-5=A2abcd

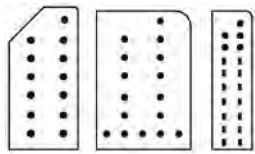


⑧タイプ H 大鎧の並札と樺太

アイヌ鎧小札(最上部の緘孔

が端にかたよって1個のものは

a/2のように表す)。



H-1=a/2bcdef@2, H-2=abcdef@5

H-3=a/2bcdef@5, H-4=a/2bcdefghi@2

(3) 型式と分布(表1)

以上の型式分類を基にそれぞれの形式がどのように分布しているのか見てみたい。

A型は、これといった集中分布の特徴はないが、A-4のキプロスの小札からA-2の靺鞨、正倉院の小札までユーラシア全体に見られる。A-5は、チベットの皮鎧の小札である。

B型は、もっとも広汎にユーラシア全体に分布しているタイプである。B-1は、スウェーデンのビルカ遺跡(Thordeman 1939)、突厥(Khudyakov2007)、モンゴル(Gorelik1987)、西夏(カラホトなど 劉2003、Thordeman1939)、中国鄴南(考古1996)沿海州(シャイギンスコエ土城 Shavkunov 1993)から出土している。B-2は、スウェーデンのビルカ遺跡、アルタイ(Gorbunov2004)、突厥(前掲)、モンゴル(前掲)、西夏(前掲)、チベット(Thordeman1939、Borbrov. Khudjakov 2008)、アムール(コルサコフ墓群 Medvedev1981)、沿海州(シャイギンスコエ土城、ラゾフスコエ土城、ナイフェリド墳墓)、日本(根岸遺跡、福島八幡横穴、藤の木古墳、沖ノ島、綿貫観音山)など、ユーラシアを横断して東西に見られる。B-3タイプは東突厥、トゥワー、チュクチなど内陸アジアと日本(福島八幡横穴)にある。B-2、B-3タイプは、基本的に下襷孔部分の違いだけであり、同種の型式といえる。B-2もしくはB-3の小札は沿海州では珍しく、シャフクノーフは、このタイプの小札は、840年のウイグル帝国の崩壊以降ウイグル人の東漸により沿海州にもたらされたと説明している(Shavkunov1993; 73)。B-4は、ソウルの夢村土城出土の骨製小札に見られ(Kim et. al. 1985)、材質的に沿海州、北東アジ

アの骨、鹿角、牙製の小札鎧に関連する資料である。B-5は、アルタイに見られる(Gorbunov2004)。B-6は、チュクチと楽浪漢墓(末永・伊東1974)に見られ、B-7は、チュクチの資料にある(Thordeman1939)。一見してB型が最も広くユーラシアに分布しており、内陸アジアのステップルートを通じて東西に広まったと考えられる。その意味で、日本はその分布の東端にあたる。津野は東アジアとのつながりを指摘したが(津野1998)、実際にはユーラシア全体に結びつくものであり、遊牧民の軍事文化と密接な関連性を持つと言える。

C型は、突起をもった、きわめて特殊な小札で、今のところ分布はアルタイに限られる(Gorbunov2004)。唐の曲江池出土の小札にも突起があるが、これは二つの小札の間にある装飾で、Cとは異なる。このタイプは突起を除けばB-2であり、その亜種とすることもできる。

D型は、小札中央の緘孔がなく、草摺の小札の可能性もある。D-1は、モンゴル、ホフホトの二十家子、沿海州の靺鞨遺跡、藤ノ木古墳にみられる。二十家子の小札は、上下左右の小札と緊縛される方式であり、上下に可動できる通常の小札とは異なる。むしろ秦の兵馬俑の小札などとの類縁性がみられる。D-2は、B-2の中央の緘孔がないもので、福島八幡横穴、正倉院にある。D-3は、津野が分析した鹿の子にあり、画期を示すものとされた。D-4は、中国鄴南城、沿海州ポリツェと千葉の祇園大塚山古墳などに見られる。D-5は、吉林省老河深や沿海州のポリツェ期の遺跡に見られる。

E型は、緘孔、綴孔が二個一組で同じように並ぶものだが、特にE-2が特徴的で、中国東北地区、沿海州、東北日本に見られる。E-3は、シュレンクによるニブフの鎧だけだが、E-2の系列を引くものと考えられる。E-4は、靺鞨と日本に、E-5は靺鞨に、E-1、E-6、E-7は日本にある。

F型は、Eの中央に緘孔が存在するもので、一点だけ日本にある。

G型は、小札上部の緘孔が横に二個並ぶもので、G-1が中国鄴南城、G-2、G-4が二十家子、G-3が東突厥に見られる。E型の変形と考えてよいだろう。

H型は、大鎧の並札と樺太アイヌの小札のグループである。

以上のことから、完成された小札型式はB型であり、明らかに内陸アジアを中心に分布し、遊牧の民の鎧小札と考えてよいだろう。E型は、東ユーラシア、極東での発展形であり、H型はさらにその変化したものと考えてよい。

(4) 型式と編年(表2)

A型は、編年的にはまとまりはない。ただ、キプロスから出土したA-4がBC6世紀とされている。A-1は、チュクチの鎧に見られるが、確認されたのは今世紀に入ってからである。A-2は8世紀の靺鞨、奈良時代に見られる。A-3は、4-5世紀のアルタイに、A-5は、チベットの15世紀以降の皮鎧に見られる。

B型は、最も広く分布している形式だが、特にB-1、B-2が空間的にも編年的にも著しい。B-1は、5世紀ごろから13世紀まで見られ、B-2は4世紀から19世紀まで存在する。ヨーロッパでは、いずれのタイプも9世紀に見られ、チベットでは、最近まで作られていたことが知られる(Bobrov and Khudjakov 前掲)。B-3は、6-8世紀にアルタイ、東突厥、7世紀の日本に見られる。B-4は、韓半島で4-5世紀に確認されている。B-5は8世紀にはアルタイで、B-6は、前漢の楽浪漢墓と19世紀以降チュクチの資料で確認された。B-7は、西シベリアでは4世紀、チュクチでは19世紀にある。

C型は9世紀に見られる。

D型は、かなり幅広い年代に分布する。D-1は、後漢の時期に見られ、さらに6世紀にも存在する。D-4は、BC5-1世紀のポリツェ文化から紀元前後、後漢までと4-6世紀代の北燕、北周、6世紀代の日本の古墳時代に見られる。

E型は、6世紀以降に見られるが、とくにE-2は日本と大陸との関連が指摘されている。E-3は、19世紀末に確認されたものだが、実際にはそれ以前の製作であろう。E-4、E-5は靺鞨と6世紀の古墳時代に、E-6は6世紀の古墳時代に見られる。

F型は5世紀の古墳時代に見られ、G型では、G-1が6世紀の北周に、G-3は6世紀の東突厥、8世紀の靺鞨に、G-2、G-4は紀元前後の前漢にあたる。

H型では、大鎧は11世紀以降にあらわれ、樺太アイヌの鎧の正確な年代は不明であるが、平安時代との説もある。

以上のことから、B型を中心とする小札の原型は、紀元前にすでに出現していた。隆盛をみたのは、紀元後を中心に5-12世紀ごろまでで、広くユーラシア全体で使用されていたことが分かる。E型は、その発展形として東ユーラシア、極東で成立しさらに日本の大鎧の小札へと変化をとげたと思われる。

4. 小札から見た日本列島の鎧

以上の小札の分析をもとに日本における小札鎧について①秋田城出土の皮小札と②樺太アイヌに伝承した皮鎧の問題を検討してみたい。

(1) 秋田城出土小札と大陸の小札

秋田城第72次調査により発見された皮製と推定されている小札については既に津野により大陸との密接な関連性が指摘されている(津野2000)。ここでは、小札の型式分類から再度検討してみたい。出土小札は、全部で740枚以上確認されていて、9世紀前半のものとして推定されている(伊藤2000)。その孔の構成は、上半に5列、下半に3列のE-2(abcde-fg@1~3)やE-5(abcd-e-fg@2)に類似している。伊藤は、これらを四類に分けているが(前掲;134)、腰札を除く胴部の小札は最下部のいわゆる下裾孔の数の違いを除けば、孔の構成に関する限り一種類としていいだろう。これらの小札を北方系の小札として、渤海・靺鞨との強い結び付きを指摘した津野の見解は卓見といえよう(津野2000;7)¹²⁾。E-5(abcd-e-fg@2)は、靺鞨のロシア極東のトロイツコエ墳墓もしくはナイフェリド墳墓からも出土している。E-2は、シャープカ遺跡出土の鉄小札(Derevianko1987;213)や女真期の沿海州のシャイギンスコエ土城(表1,表2)から出土する。遼寧省五女山城や吉林段界壕辺堡など中国東北地方の渤海から金にかけての遺跡からもE-2が出土することから(津野1998、服部2006)、E-2、E-5などの小札はツングース系の靺鞨、渤海、女真などの小札であろう。デレビャンコの図示したポリツェ期の骨製小札鎧も全て角ばった長方形であり、孔の位置も小札の端に位置するという共通点がある。またシャフクノーフが指摘したようにB型などの中央に緘孔のくる小札が840年のウイグルの東漸以降とするならば、この地域の小札はB型からの発展ではなくもともとE類型であったかもしれない。

年代的には秋田城と靺鞨が重なり、女真・金は遅れて11-13世紀である。材質の違いはあるものの、このような小札孔構成の類似は、小札の緘と綴方の類似性につながるものである。また、服部も指摘するように中間に緘孔がなく、緘孔も綴孔も同じく札の端に位置するE型への変化は、緘孔の同位置化

資料名(著者)	長 length	幅 width
秋田城 (Akitajoh, Japan) (伊藤 2000)	9.8-10.6cm	2.7-4.0cm
靺鞨 (Bokhai, Russia) (Shavkunov 1993)	7.6-8.3cm	2.2-3cm
女真 (Zhurzhen, Russia) (Shavkunov 1993)	9.2cm	約2.6cm
チベット革鎧 (Tibet) (LaRocca2006、宋、高編2004)	8-8.2cm	2.2-3.2cm
アイヌ鎧 (Karafuto Ainu A type, 末永 A 形式) (末永、伊東1984)	9.3-10.1cm	5.6-6.3cm
大鎧 (仲郷遺跡、仙波1997)	7.2-7.8cm	3.8-4.3cm

表3 小札長幅比較 Table 3 Lamellar size

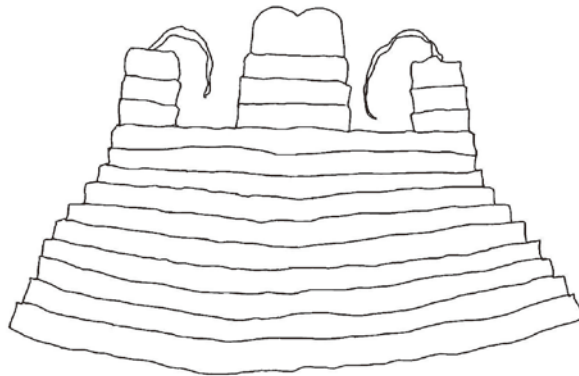
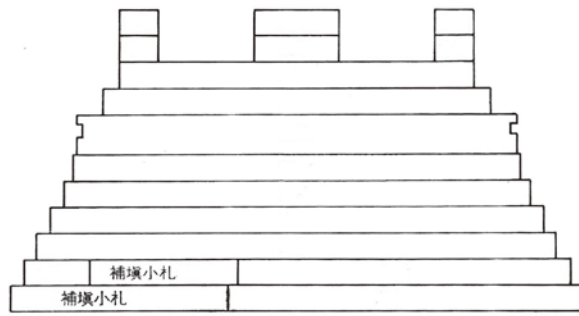
と中央の緘孔の消滅とともに、基本的に日本も大陸と同じような変化を示している。津野が指摘するように(津野2000; 6-7)日本の小札孔も大陸と併行して変化したことを推測させるものである¹³⁾。19世紀末にシュレンクがギリヤークの伝世品に見た小札も、同じ系列に属するE-3であり、緘孔の構成も上半の孔が5列から3列+3列の6列になったことを除いてE-2と同じ構成である(Schrenck1891; XLIV)。表3に示したように、長さは近似するが、アイヌ鎧の幅は他の約二倍ある。以上のことから見ると、5-6世紀以降前述のアイヌ鎧の小札も含めてE型の小札孔構成をもつ甲が日本も含めた北東アジアで広く使われていた¹⁴⁾。日本では、926年の渤海の滅亡以後、大陸との結びつきが断たれるなか、独自にE-2(例えば秋田城の2行16孔)の縦取で緘される小札から、最下部の下捌孔2孔が消滅して2行14孔の小札が生まれ¹⁵⁾、縄目取に緘することによって最上部左の緘孔が不要になり、2行13孔の大鎧の並札が成立した可能性を指摘したい。

(2) 小札からみたアイヌ鎧

前述のように、新井白石以来、アイヌ鎧については様々な記述がある。また、末永と伊東により日本、中国、韓半島、北東アジアなどの事例も参照してアイヌの挂甲について詳しく分析された(末永・伊東; 1974)。ここでは、それらによりながら若干新しい知見も加え論じたい。

アイヌ鎧についての記録として最も古いものの一つに17世紀初頭のアンジェリスの報告がある。それには「鉄製ではなく、板簾(下線は筆者による)で造った具足を使うが、それは笑うべきものでございます」と記述がある(チースリク1962; 94-95)¹⁶⁾。これは、おそらく鉄ではなく皮製の小札で作ったコート形式(あるいは挂甲様式)の鎧を指していると思われ、『蝦夷志』の「ハヨクヘ」、『三国通覧図説』の「ヨケベイ」、『蝦夷嶋奇観』の「アヨツベ」などと記載された鎧に対応するものであろう(図1-6)。ニプフ出身のタクサミは、ロシア側の史料に残された鎧を来て武装する戦う民としてのアイヌの姿を描いた。それは、「アイヌは武装した民族だった。……刀や剣、棍棒、甲冑¹⁷⁾、短剣その他の武器は、宗教的崇

拝の対象となり……」(タクサミ他1998; 120)といった姿であり、好戦的で鎧を着たアイヌを髣髴とさせるものである。バチェラーも、「アイヌは戦争で鎧をまとう。しかし、それは極めて軽い種類のもので、全体が皮からできている」と指摘した(Bachelor1892; 287)。この鎧も『蝦夷志』などの皮鎧のことであろう。伊東信雄により1936年樺太で発見された皮小札製でコート形式の鎧については、末永雅夫、伊東信雄により『挂甲の系譜』として詳しい研究がなされている(末永・伊東1984)。末永・伊東は、文献資料からアイヌ民族に挂甲式の小札鎧が存在したことを明らかにした(前掲; 85-109)。また、中国、チベット、日本などの小札鎧資料と比較して、その小札鎧が緘方などから見た場合、日本の古墳時代から奈良時代の挂甲に近く平安時代初期ごろの製作によると推測した¹⁸⁾(前掲; 127-129)。近藤も、大鎧につながる11世紀の皮札甲と推定している(近藤2000; 29)。全体の形態は確かに胴丸式挂甲で前綴じのコート形式であり、古墳時代後期の挂甲に類似する。また、『蝦夷志』、『三国通覧図説』の皮鎧とも共通性がある。同時に、この形式は、ユーラシア(チベット、アルタイ、モンゴル、鮮卑、中国北朝、契丹、女真)に広く分布するコート形の小札甲にも近似し(図1-1 契丹の鎧図参照。Gorelik1987、1993、Shavkunov1993など参照)、日本に限定されたものではない。最も新しいものとしては、末永も挙げているように、前述のチベットや四川省西部のチベット族の鎧、ロロ族の鎧、チュクチ族、コリヤーク族、イヌイト族など北東アジア諸民族の鎧にも近似する。特にこの鎧を開いた平面形は末広がり「扇形」であり、前述の15-17世紀と測定されたメトロポリタン美術館所蔵のチベット皮鎧の平面形に酷似する(図1-4 写真チベット皮鎧、図2下参照)。全体の構造は、末永の用語では立場、長側、草摺の三部に分けられているが、チベット鎧では長側と草摺の区別が困難なので、立場とそれ以下と二つに分けるほうが理解しやすい。それによれば、図2の表に見られるように、(1)立場以下裾までの段数や小札数の変容は極めて類似しており、鎧としての形態構造自体が類似しているのは明らかである。(2)一方で、アイヌ鎧の代表的な小札形式(末永によるA形式)は①



	末永・伊東 アイヌ挂甲	ラロッカ チベット皮鎧
立場1	6-13-6	7-19-9
立場2	6-13-6	8-15-8
立場3	なし	11-8-8
一段	54	74
二段	59	63
三段	67	78
四段	68	65
五段	71	71
六段	75	79
七段	79	76
八段	106 (補修のため 小札幅狭い)	71
九段	120 (補修のため 小札幅狭い)	69
十段	なし	66

アイヌ鎧とチベット鎧の構成と小札数

図2 樺太アイヌ鎧とチベット皮鎧
(上 末永・伊東1984; 図51より、
下 LaRocca 2006 p.125写真から)
Fig. 2 Armor of the Karafuto Ainu
and the Tibetan Hide Armor
(from Suenaga and Itoh 1974 and
LaRocca 2006)

abcdef@5・② a/2bcdef@5であり、後補の小札(B形式)は③ a/2bcdefghである。①は前述の秋田城出土の小札や靺鞨、女真の小札のタイプEに通じ、縦取の緘に適しており2行12孔+下捌孔5である。②は2行11孔+下捌孔5、③は2行19孔という配置であり、②や後補の③は最上部の孔が片側に一個だけという構成からみて、大鎧の並札(2行13孔、a/2bcdef@2)と同類か同じコンセプトによるもので、縄目取による緘に適した孔の構成である(図3)。最上部の緘孔が縄目取りに適した一個のものと縦取りの二個のものが併存することを考えるとまさに大鎧の並札出現前後の時期とすると理解しやすい。(3)小札の綴方や緘方は、チベット皮小札鎧の単純な緘方(Thorndeman1939; 254-255)とは異なり、末永が指摘したように大鎧の縄目取に類似した緘や菱縫による綴りに共通する技法がある。(4)客観的に見て、アイヌ以外の極東から北東アジアの諸民族間にも内陸アジアの遊牧諸民族と共通するコート形式の挂甲鎧が広まっていることは明らかで、アイヌ鎧もこのような流れの中にあることは間違いない。以上からみると、①扇形という形態的な観点から見れば、樺太のアイヌ鎧はチベット、モンゴル、北東アジアの小札鎧と共通し、②小札孔の形式や緘方は、日本の大鎧と近似するという、③極めて折衷的な様式であると言えよう。この特徴が、①末永・伊東あるいは近藤の言うように大鎧直前の(胴丸式)挂甲の遺存品で、日本の鎧の変遷の一時期を示すのか、あるいは②内陸アジアから中国の東北部に広がるコート形小札甲の影響を強く受けて作られた北海道から樺太のアイヌに特有

の鎧様式なのかは今のところ不明と言わざるを得ないが、古代から大鎧成立まで途切れることなく大陸と関連する小札型式や鎧形式が存在してきたのは間違いない。

まとめ

小札は5-6世紀を中心に12世紀にかけて、B-1、B-2型を中心にユーラシア全体に同じ型式が分布する(表1、表2)。B型を除いたA型、C型、D型、F型、G型の小札はその類型とあるいは変化形としてよいであろう。E型は、東アジア、極東の小札とみられ、G型はさらにその発展形としてよいだろう。B型を中心にした、ユーラシア全体に見られる小札鎧は、その東西にまたがるさまざまな遊牧諸民族の軍事文化の直接的な影響のもとに成立した現象と考えられる。日本の古墳時代から奈良時代の小札も例外ではない。沿海州から中国東北部、モンゴル、アルタイなどのB-1、B-2の小札と同一であり、韓半島を経由して内陸アジア、北東アジアの遊牧民の軍事文化と密接なつながりがあったことを再認識させるものである¹⁹⁾。少なくとも小札で見る限り韓半島、沿海州から内陸アジアとの関連の深さが見える。このような関係は古墳時代に始まり奈良時代まで明確に認めることができる。小札自体も緘孔が中央に、綴孔が両端に位置する奈良時代までのAからD型の配置から、緘孔、綴孔とも両端に位置するE型への変化が見られる。これは、基本的に沿海州や中国東北部出土の小札の変化と併行した現象で、9世紀の秋田城の小札

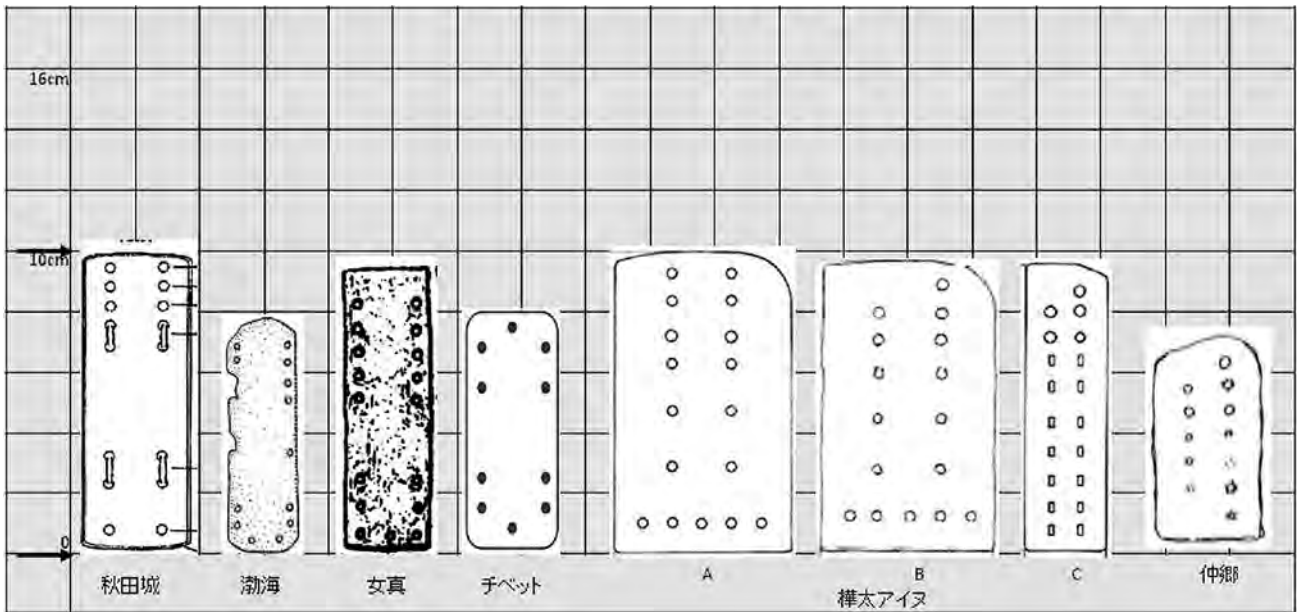


図3 小札の大きさ比較 (2cm グリッド)

Fig.3 The size of lamellae (Akitajoh Japan, Bokhai, Zhurzhen, Tibet, A-C Karafuto Ainu, Nakagou Japan : From left to right ; 2cm grid)

もその流れの中にあることは、すでに津野が指摘したとおりである(津野2000)。このことは、大陸とくに北東アジアの諸民族、国家とのつながりが古代から継続的に維持されていた可能性を示している。本州では、10-11世紀に日本独自の大鎧²⁰⁾が出現するが、並札のようなH型の小札も前述のように渤海を代表とする大陸との関係が希薄になったあと、縄目取の技法とともに成立したものであろう。さらに、北海道、樺太では、ニブフの鉄鎧、樺太アイヌの皮鎧や北海道アイヌの挂甲式の小札鎧にうかがわれるコート形式の鎧の存在から考えると、中世あるいは近世に至っても大陸との軍事的結びつきが継続していたことが明らかだ。このような鎧に見られるつながりは、いわゆる「山丹交易」のもう一つの顔でもあろう。

謝辞

筆者が全く専門外のこの小論を書こうと思いついたのは、恩師、故芹沢長介先生が、その晩年に多くの北方関係の資料を収集なさっていて、そのなかに鎧資料も含まれていたことがきっかけである。また、伊東信雄先生が樺太から招来された東北大学所蔵のアイヌ鎧についてもかねてから興味をもっていた。私はこれまで細石刃や土器の起源といった観点から日本列島の先史文化と大陸の文化の結びつきを追求してきた。ここに大陸と日本の鎧、特に小札の比較に至ったのも、私としては、その延長線上にあることと考えている。今回参照できなかった文献も多いことを考えると内容的にまだ満足できるものではない。今後さらにこの分野の資料を渉猟し、充実させたいと考えている。この分野に関する論文を書く機会を作っていただいた故

芹沢先生にまず心からの御礼を申し述べ、この小論を捧げたい。

文献資料について、岡田清一、関矢晃、藤澤敦各氏に御助力いただき、英文 Summary については K.Schmidt 氏に御協力いただいた。感謝申し上げたい。

註

- 1) 中国では、「小札」に対して「甲札」もしくは「甲片」を用いている(白・鐘2008)。
- 2) これに対し、本来「札」を使用すべきであるとの指摘がある(鈴木1996、近藤2000)。しかし、「小札」は国史、美術史、有職故実、考古学の中で広く使われてきた名称であり、ここでは通称として「小札」を用いることとした。
- 3) この論考では armour, armor という意味では、「鎧」を用いることにする。兜(冑)まで含めて論ずる場合には「甲冑」を使用する。
- 4) 挂甲の挂は打ち掛けるという意味であり、近藤によれば、古墳出土の「挂甲」を挂甲と呼ぶのは、考古学研究者による研究史上の特別な使い方であるという。むしろいわゆる補襠鎧が文献上の挂甲に当たると考えられる(近藤2000)。
- 5) 日本で言う生皮をたたいて固めた撓皮のことか。
- 6) ラロッカ原注「所蔵メトロポリタン美術博物館、購入 Arthur Ochs Sulzberger 寄贈2001年(2001;268)」
- 7) ラロッカ原注「ナシ(また、Nakhi ナキ、Nahi ナヒともつづられる)族の最も詳しい論考はロック1955にある。ナヒの鎧の最上の資料はリーズの王立鎧博物館に見られる(XXVIA.1106)。イ(ロロ)族の鎧の詳しい研究はまったくないが、シカゴのフィールド博物館にある資料が、ストーン1924の図76に載せられている。加えてロロ族の鎧が、一点は王立鎧博物館(XXVIA161-2)、一点はメトロポリタン美術博物館(20, 142)にある。」、筆者注 ドローヌがこの鎧を着用したロロ族の戦士との出会いを写真とともに記録している(ドローヌ1982;155)。
- 8) ラロッカ原注「結果は2シグマで大体95%の確立である。ベータアナリシス、放射性炭素年代測定研究室で2005年の3月21日に測定された。」
- 9) かつては大英博物館にも所蔵されていた(British Museum 1910;70-71, plateIII)。

- 10) アイヌ民族が江戸中期まで激しく倭人と戦ったことはよく知られている。また、極めて強靱であったことは、元との戦いなどでも有名である(例えばステファン1971)。
- 11) 2007年には東萊城跡から壬申倭乱時のコート状の鉄小札鎧が発見され、写真で見ると限り長方形の小札による掛甲式の鎧のように思われる。小札の重なりは、下の小札帯が上の小札帯の下に入る葺き瓦式のように説明されるが裏返しかもしれない(東亜日報2007)。2009年には、慶州から4-6世紀の新羅時代の甲冑と馬甲が初めてまとまって発見された(Joongang Daily 2009)。いずれも詳しい正式報告がまたれる。
- 12) 大陸と東北日本との結びつきについて、多分に伝説的ではあるが、『今昔物語』あるいは『宇治拾遺物語』所収の阿倍頼時の胡渡りの説話(『今昔物語集』卷三十一『陸奥国安倍頼時行胡国空返語第十一』)は、11世紀の段階で大陸とのかすかな交流のあった可能性を示唆するものであろう。①物語の作者は、明らかにこの地を「蝦夷」ではなく「胡」と呼んでおり、しかも陸奥の豪族安倍氏は当然の事ながら北方地域との交易があったことは十三湊の例からも明らかで(例えば福田1995)、蝦夷地の知識も持っていたはずであること。②この河が広大な草原の河口部を持ち、底も知れない沼のような、30日も遡りうる大河であること。③さらに、遡上する間、渡る浅瀬が無いほどの大河であること。④「胡国の人」が「赤き物の□□□て頭を結いたる」という風俗は、『東洋服装史論攷』にみる新羅の布による幟頭の例(杉本1984;334)や高麗庶民の頭部の中(前掲;368 IV-9表)を思わせる。⑤「千騎」と記述されるほどの多くの馬がいたということ。⑥「馬筏」という優れた騎馬の術をもっていることなど具体的な描写があり、宗任法師(頼時三男)の実体験であるとみられる。頼時の渡った場所についても、北海道とする説が有力である(海保1987;62)。一方、牧墨僊による文化七年発行『一宵話』の「蝦夷」の項でも阿倍頼時の今昔物語もしくは古今著聞集の北に渡った話がとりあげられているが(牧1927)、今昔物語に胡人による騎馬の大群に関する記述については、北海道には馬がいなくて明確に記載し、蝦夷ではなく胡人ではないかと推定している。また、胡騎の出所についても山丹、満州の可能性を指摘している(前掲;349-350)。牧墨僊の指摘のように北海道の馬は和人により14-5世紀以降に持ち込まれたものであり、11世紀に大量の騎馬の存在は考えにくい。ただ、アンジェリスの記述にあるように江戸初期には、アイヌは乗馬を知っていた(チースリク1962;55、福永1995;190)。
- 13) 津野は、中央(第三)緘孔の消滅を奈良時代から平安時代への小札変化第二画期の大きな特徴とした(津野1995;66-67)。また、このような形態の小札を北方式の小札とした(津野1998;162-163)。近藤は津野の仮説を支持し、大鎧の小札への変化ととらえている(近藤2000)。ただ、時間的に遡る古墳時代の小札にもD、Eタイプはある(表1、2参照)。中央の緘孔がないDタイプの小札は板札最下部の綴小札の可能性もある。
- 14) 服部は、Eタイプ(服部のいう2列孔小札)が東北地方では長く継続すると指摘している(服部2006;35)。
- 15) 「延喜の鎧」という伝承を持つ大山祇神社の沢瀉緘鎧の小札は、片山形ではあるが2行14孔を持ち、縦取りに緘されている(例えば尾崎1970;12図)。最上部が2孔であるのは縦取りの故であり、これなどは2行13孔の並札に変わる直前の形を示すものではなかろうか。
- 16) 同ポルトガル語の原文では、“Usao de Gusocu nao de ferro, senao fedo de taboinhas (単数は tabuinha か直訳小割り板、板簾など) que he cousa de zombaria”とあり(チースリク1960;35)、「具足を使用するが、鉄でなく小割板(訳語としては「札」

あるいは「小札」が正しいであろう)で造られ、それは物笑いの種となる」と訳されるであろう。

- 17) アイヌ鎧について、タクサミはクヤキという表現を用いている、これはモンゴル語でフヤクとも呼ばれ、長いコート式甲冑のことである(Gerelik1987;197図5-10)。
- 18) サハリンの博物館にはもう一領掛甲式の鎧があることが知られている(末永・伊東1974;101)。立場以下の段数が一段多い11段で、チベット皮鎧と同じである。また、小札も細身で数が多いとされており、緘の革紐の垂れ方など全体の様子は、写真で見ると例えば、ソードマンの引用したチベット皮鎧にもよく似ている(Thordeman1939;fig.239-240)。しかし、その胸板と押付板に古式の巴文が描かれており、日本との関連性を指摘されてきた(末永・伊東 op.cit., 101)。
- 19) 鳥居龍蔵が、日本の小札甲は、アルタイ・チベットなどの小札甲に類似し、北方アジア式であると指摘している(鳥居1925;314)。
- 20) 大鎧の起源については、襦褌鎧からの発達が説かれることが多い(末永・伊東1974、近藤2000など)。中国では後漢末以降に襦褌鎧が出現、南北朝に盛行し、唐代には消滅したとある(白・鐘2008;8)。日本では古墳時代にすでにこの形式が発見されていることからして(末永)、隋・唐以前に韓半島からもたらされたことを示している。その意味で胴丸形式の掛甲鎧と同じ時期であろう。チベットでは20世紀初頭にもこの種の鎧が用いられていたことが知られる(Thordeman1936;250-251)。

引用文献

{邦文}

- 新井白石 1720 『蝦夷志』『北方未公開古文書集成第一巻』39-81 叢文社
- 伊東武士 2000 「秋田城跡の発掘調査成果」日本考古学 第10号 127-137 日本考古学協会
- 井上秀雄他訳注 1974 『東アジア民族史 正史東夷伝1、2』東洋文庫264-265 平凡社
- 上田雄 1992 『渤海国の謎。知られざる東アジアの古代王国』講談社現代新書
- 上村英明 1990 『北の海の交易者たち—アイヌ民族の社会経済史—』同文館
- 内田吟風 田村実造他訳 1971 『騎馬民族史』東洋文庫197 平凡社
- 尾崎元春編 1968 『日本の美術24、甲冑』至文堂
- 尾崎元春 1970 「甲冑」『原色日本の美術25、甲冑と刀剣』1-72 182-214 小学館
- 海保嶺夫 1984 『近世蝦夷地成立史の研究』三一書房
- 海保嶺夫 1987 『中世の蝦夷地』中世研究史叢書 吉川弘文館
- 加藤九祚 1986 『北東アジア民族学史の研究』恒文社
- 金山順雄著、山岸素夫監修 2006 『甲冑小札研究ノート』レーヴック
- カルピニ・ルブルク 護雅夫訳 1979 『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社
- 菊池俊彦 1995 『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会
- 小林謙一 2008 『東アジアにおける武器・武具の比較研究』平成16年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 近藤好和 2000 『中世的武具の成立と武士』吉川弘文館

正誤表

71頁左段9行目 誤)「東アジアの小札甲野展開」 正)「東アジアの小札甲の展開」
 右段2行目 誤)福永豊彦 正)福田豊彦

- 佐々木史郎 1996 『北方から来た交易民、絹と毛皮とサンタン人』NHKBooks772
- 佐々木稔 2008 『鉄の時代史』雄山閣
- 笹間良彦 1973 『図解日本甲冑事典』雄山閣
- 清水和明 1990 「掛甲と付属具」『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 43-82
- 清水和明 1990 「Ⅲ掛甲」『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 362-375
- 清水和明 1996 「東アジアの小札甲野展開」『古代文化』第48巻第4号 1-18 古代学協会
- 清水和明 2009 「小札甲の製作技術と系譜の検討」考古学ジャーナル581 22-26
- 白井克也 1992 「ソウル・夢村土城出土土器編年試案：いわゆる百濟前期外城論に関連して」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』11 49-80
- 鈴木敬三 1949 『改訂増補故実叢書35 武装図説』明治図書出版株式会社
- 鈴木敬三編 1996 『有職故実大事典』吉川弘文館
- 鈴木敬三 1996 「大鎧」『有職故実大事典』100-102
- 鈴木敬三 1996 「甲冑」『有職故実大事典』144-145
- 鈴木敬三 1996 「札」『有職故実大事典』330-331
- 末永雅雄 1943 『日本武器概説』桑名文星堂
- 末永雅雄 1944 『日本上代の甲冑』創元社
- 末永雅雄 1971 『日本武器概説』社会思想社
- 末永雅雄、伊東信雄 1974 『掛甲の系譜』雄山閣出版
- ステファン JJ. 安川一夫訳 1973 『サハリン、日・中・ソ抗争の歴史』原書房
- 仙波亨 1997 『仲郷遺跡』茨城県教育財団文化財報告124集 財団法人茨城県教育財団
- 高橋工 1995 「東アジアにおける甲冑の系統と日本一特に5世紀までの甲冑製作技術と設計思想を中心に」『日本考古学』第2号 139-160 日本考古学協会
- タクサミ チューネル M. コーサレフ ワレーリー D. 著 中川裕 監修 熊野谷葉子訳 1998 『アイヌ民族の歴史と文化、北方少数民族学者の視座より』明石書店
- 田中晋作 1991 「武具」『古墳時代の研究8 古墳Ⅱ 副葬品』39-55 雄山閣
- チースリク H. 編 1962 『北方探検記—元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書』聖心女子大学カトリック文化研究所 吉川弘文館
- 津野仁 1995 「掛甲小札と国衙工房—茨城県石岡市鹿の子C遺跡をめぐる一—」『大平臺史竄』第13号 55-77
- 津野仁 1998 「古代小札甲の特徴」『特別展 兵の時代 古代末期の東国社会』横浜市歴史博物館 (財)横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 155-164
- 津野仁 2000 「北方系の小札甲」『アシアンレター』第7号 4-7 「東アジアの歴史と文化」懇話会
- ドーソン 田中萃一郎訳 1936 『蒙古史』上 岩波書店
- 鳥居龍藏 1925 『人類学上より見たる我が上代の文化(1)』叢文閣
- ドロース著 矢島文夫 石沢良昭訳 1982 『シナ奥地を行く』白水社
- 東亜日報 2007 「朝鮮鱗よろい原型そのまま発見」(日本語版) <http://www.donga.com/fbin/output?n=200706060077&top20=1>
- 野上丈助編 1991 『論集武具』学生社
- 服部敬史 2006 「中国東北地方における古代・中世の小札甲」『和光大学表現学部紀要』7 15-37
- 林子平 1927 『三国通覧図説』『江戸物語』所収 江戸文学研究会編 1-87
- 福永豊彦 1995 「鉄を中心にみた北方世界—海を渡った鉄」網野善彦 石井進編『中世の風景を読む—1、蝦夷の世界と北方交易』153-198 新人物往来社
- 藤本正行 2000 『鎧をまとう人びと、合戦・甲冑・絵画の手びき』吉川弘文館
- 牧里遷 1927 「一宵話」文化七年 『日本随筆大成 第一期』巻10 335-432 吉川弘文館
- 間宮倫宗 1979 (安政2年1855刊) 『北蝦夷図説』名著刊行會
- 馬淵和夫 国東文麿 今野達校注 1976 『今昔物語集四』小学館 日本古典文学全集 小学館
- 村上嶋之允(秦檣丸) 1800 『蝦夷嶋奇観』(嘉永6年写) 北海道大学附属図書館蔵 北方資料データベース <http://ambitious.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/kyuki/doc/OA000900010000.html>
- 山上八郎 1941 『日本の甲冑』創元社
- {邦文以外}**
- Bai Rong Jin, and Zhong Shao Yi, 2008 “A Complete Collection of Traditional Handicrafts of China, Reconstruction of Armor” Daxiang Publishing Company, Zhengzhou. In Chinese. 白荣金 鐘少異 2008 『中国伝統工芸全集・甲冑復元』大象出版社 鄭州市
- Barnes, G.L. 2000 “Archaeological Armor in Korea and Japan: Styles, Technology, and Social Setting”, in “Journal of Asian Archaeology” Vol.2, no.3-4, 60-95
- Batchelor, J., Rev., 1892 “The Ainu of Japan, the Religion, Superstitions, and General History of the Hairy Aborigines of Japan” Fleming H. Revell Company, New York.
- Beckwith, C.I., 1987 “The Tibetan Empire in Central Asia” Princeton University Press, Princeton.
- Бобров, Л.А., Худяков, Ю.С., (Bobrov. L.A., and Khudjakov, Yu.S.) 2008 “Вооружение и тактика кочевников Центральной Азии и Южной Сибири в эпоху позднего средневековья и раннего нового времени (XV-первая половина XVIII в.)”, 『中世後期から近世初期(15世紀から18世紀前半)の内陸・南シベリア遊牧民の武装と戦術』“Armament and Tactics of the Nomads of Central and Southern Siberia during the Late Medieval and Early Modern Ages (15th-first half of the 18th century A.D.)” St.Petersburg State University, Faculty of Philosophy.
- British Museum 1910 “Handbook to the Ethnographical Collections” British Museum, London.
- Carpini, Friar Giovanni DiPiano 1996 “The Story of the Mongols whom we call the Tartars” translated by Erik Hildinger 1996, Brandinton Publishing Company, Boston.
- Chen, Shou “San Guo Zhi; The Records of Three Kingdoms”, Beijing. In Chinese. 陳寿撰 陳乃乾校点 『三国志』全五冊 1982 中華書局出版 北京
- Chen Dawei ed., 2009 “Illustrated Ancient Chinese Armour”, Shanghai Publishing Company, In Chinese. 陳大威編 『画説中国古代甲冑』上海書店出版社
- Деревянко, Е.И. (Derevianko, E.I.) 1987 “Очерки Военного дела Племен Приамурья”, Наука, Новосибирск. Derevianko, E.I., 1987 “Reports on the Warfare of Peoples on the Amur” Novosibirsk. 『アムール流域住民の戦に関する報告』
- Dien, A.E. 2000 “A Brief Survey of Defensive Armor across Asia”, in “Journal of Asian Archaeology” Vol.2, no.3-4, 1-22
- Dien, A.E. 2000 “Armor in China before the Tang Dynasty”, in “Journal of Asian Archaeology” Vol.2, no.3-4, 23-59

- Fredholm, M., 2007 "The Impact of Manchu Institutions on Tibetan Military Reform" 6th Nordic Tibet Conference, Stockholm, 5-6 May 2007, 1-16.
- Горелик, М.В. (Gorelik, M.V.) 1987 "Ранний монгольский доспех (IX-первая половина XIVв.)," "Археология, Этнография и Антропология Монголии". Новосибирск, Наука. In Russian. "Early Mongolian Armor (IX century to the 1st half of XIV century)" 『初期モンゴルの鎧(9-14世紀前半)』163-207
- Горелик, М.В. (Gorelik, M.V.) 1993 "Оружие древнего востока, IV тысячелетие – IVв. до. нэ." Наука, Москва. In Russian. "Arms and Armors of the Ancient Orient, 4 millennium BC to 4th century BC" 『古代東方の武具、紀元前4千年紀から紀元前4世紀まで』
- Горбунов, В.В. (Gorbuinov, V.V.) 2004 "Панцирные пластины тюркского доспеха", "Древности Алтая" Барнаул.1-9, <http://e-lib.gasu.ru/da/archive/2004/12/12.html>, 「トルコ鎧の小札」 "Lamellae of Turkish Armor" pp.1-9
- Hedenstierna-Johnson, C., 2006 "The Birka Warrior, The Material Culture of a Martial Society" Doctorial Thesis of Archaeological Society 2006, Stockholm University
- Hildinger, Erik 1997 "Warriors of the Steppe, A Military History of Central Asia 500B.C. to 1700 A.D." Da Carpo Press
- Hough, W., 1895 "Primitive American Armor" Report of US National Museum 1893, 627-651, Smithsonian Institution, Washington DC.
- Joong Ang Daily 2009 "Ancient Silla Armor Comes to Light" July 22nd, <http://joongangdaily.joins.com/article/view.asp?aid=2907709>
- Kim, B.H., Jung, H.G., and Lee, Y.H., 1986 "Preservation of bone lamellae unearthed from Mongcheontoseong castle" In Korean 金炳虎 鄭亨均 李容喜 「夢村土城出土骨製小札甲保存処理」 http://221.145.178.204/nrichdata/csd/book/file/1986/BBJ07_03.pdf
- Худяков, Ю.С., Соловьев, А.И. (Khudjakov and Solov'ev) 1981 "Из истории защитного доспеха в Северной и Центральной Азии", "Военное дело древних племен Сибири и Центральной Азии", Наука, Новосибирск, 135-162. "From a history of defense armor in North and Central Asia"
- Худяков, Ю.С. (Khudjakov, Yu. S.) 2007 "Золотая волчья голова на боевых знаменах, Оружие и войны древних тюрков в степях Евразии", Издательство Петербургское Востоковедение, Санкт-Петербург. "The Golden wolf's head on banners, arms, armors, and battles of ancient Turks in Eurasian Step"
- Кобко, В.В. (Kobko, V.V.) et al. 1991 "Этнографические Коллекции по Народам Крайнего Северо-Востока Азии в Музее Имени В.К. Арсеньева" РИО ПРИМУПРПОЛИКРАФИЗДАТА, Владивосток. 『アルセーニエフ記念博物館の極北東アジア諸民族に関する民族学的コレクション』 Ethnographical collections of the people of the Far North-East Asia stored in the Arsenev's Museum.
- LaRocca, Donald ed., J. 2006 "Warriors of the Himalayas, Rediscovering the Arms and Armour of Tibet" The Metropolitan Museum of Art, New York.
- Laufer, Berthold 1914 "Chinese Clay Figure, Part 1, Prolegomena of the History of Defense Armor" Publications of Field Museum of Natural History, Anthropological Series, Vol.XIII 73-315, Chicago.
- Liu Yong Huo 2003 "Chinese Ancient Military Costume" Shanghai. In Chinese. 劉永貨 2003『中国古代軍戎服飾』上海古籍出版社
- Matveyeva, N.P., Potemkina, T.M., and Solovyev, A.I. 2004 "Issues in the Reconstruction of Protective Armor of the Sargat People (Based on Finds of Yazevo-3), Archaeology, Ethnology and Anthropology of Eurasia" 20, 85-99. Institute of Archaeology and Ethnography SB RAS Press, Novosibirsk
- Медведев, В.Е. (Medvedev, V.E.) 1981 "О шлеме средневекового Амурского воина (Тайник с остатками доспеха в Корсаковском могильнике)", "Военное дело древних племен Сибири и Центральной Азии", Наука, Новосибирск 172-184. Medvedev, V.E. "On the Helmet of Amur Warriors, (A Hoard with Remains of Armor in the Korsakovskii Burials) .
- Robinson, H.R. 2002 (originally published in 1967) , "Oriental Armour" Dover, New York.
- Шавкунов, В.Э. (Shavkunov, V.E.) 1993 "Вооружение Чжуржэней XII-XIII вв." Дальнаука, Владивосток. 『12-13世紀の女真の武具』 "Panoply of the Zhurzhen XII-XIII century".
- Schrenck, Leopold von., 1891 "Reisen und Forschungen im Amur-Lande in den Jahren 1854-1856 im Auftrage der Kiserl. Akedimie der Wissenshften zu St. Petersburg, Band III Zweite Liferung. Die Völker des Amur-Landes. Ethnographischer Theil. Erste Halfte" St. Petersburg, Russia.
- Song Zhao Lin, Gao Ke and others eds., 2004 "Dictionary of Ethnic and Folklore Material Data in China", Shanxi People's Publishing Company. In Chinese. 宋兆麟 高可他編 2004『中国民族民俗文物辞典』山西人民出版社
- Stein A., "Ancient Khotan, Vol.1" xvi.
- Stjerna, N., translated by Ritzén M., 2004 "Steppe Nomadic Armour from Birka", Fornvannen 99. http://www.wataha.com.pl/download/lamelka_2.doc.
- Stone, G.C. 1934 "A Glossary of the Construction, Decoration and Use of Arms and Armor in all Countries and in all Times, Together with some Closely Related Subjects" Portland.
- The Center for Science and Technology in Archaeology of IA, CASS. 1996 "Reconnaissance and Excavation of the Iron Armor and Helmet of the Northern Dynasty of the City of Yanan" In Chinese. "Kaogu" 1996 No.1, 22-45. 中国社会科学院考古研究所考古科技実験研究中心 「鄯南城出土的北朝鉄甲冑」『考古』1996年第一期 22-45
- Thordeman, Bengt, in collaboration with Norlund, Poul and Ingelmark Bo E., 1939 (new edition published in 2001) "Armour from the Battle of Wisby 1361" Chivalry Bookshelf
- Turnbull, S. "The Mongols" Osprey Publishing, Westminster.
- Walker, B.L. 2001 "The Conquest of Ainu Lands ; Ecology and Culture in Japanese Expansion 1590-1800" University of California Press, Los Angeles.
- Yang Hong 1980 "Essays on Chinese Ancient weapons", Beijing, 楊泓 1980『中国古代兵器通叢』文物 北京
- Yang Hong 2005 "General Survey of Ancient Chinese Weaponry", 楊泓 2005『古代兵器通論』紫禁城出版社 北京
- Yang Hong 2007 "Essays on Chinese Ancient Weapons and Art-Archaeology", Beijing, In Chinese. 楊泓 2007『中国古兵器与美術考古論集』文物出版社 北京
- Zhang Wei Xing. 2004 "A Study of Qin Armors and Helmets", Shanxi People's Publishing Company, Xian. In Chinese. 張衛星『秦甲冑研究』陝西人民出版社 西安

表1-1 小札のタイプと分布 綽綽不動 Table 1 Distribution of lamellar types: not to scale

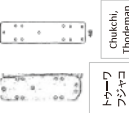





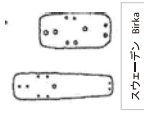


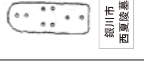

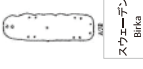
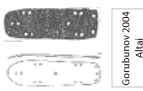
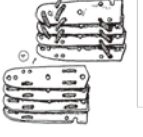






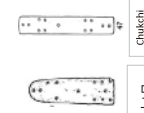
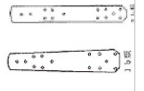
	ヨーロッパ Europe	内陸アジア Central Asia	モンゴル Mongolia	中国(長城より南)、チベット China and Tibet	シベリア Siberia	沿海州、サハリン Maritime region and Sakhalin	韓半島 Korean Peninsula	日本 Japan
Type A-1 AabBcd@2					 Chukchi, Thodeman トゥーク フシヤコ			
type A-2 AabBcdC@								 正倉院
type A-3 AabBcdCef@3		 Gornburev 2004 Altai						
type A-4 AabB@2				 北亞馬希特 劉 2003				
type A-5 AabcdB	 Robinson 2002			 新運サン ハチ運助				
type B-1 ABabC@ (1,2 or 3)	 スウェーデン Bilka	 庫突厥 Khudjakov 2007	 モンゴル Gorelik 1987	 張川市 西原慶		 Shaikunov 1992 シャイクンニコエ 女真		
type B-2 ABabCcd@-@3	 スウェーデン Bilka	 Gornburev 2004 Altai	 モンゴル Gorelik 1987	 張川市 西原慶	 トウワー フシヤコ	 Shaikunov 1993 シャイクンニコエ 女真	 吉林省 集安高句麗墓	 藤ノ木 沖ノ島
type B-3 ABabCcdD@2		 庫突厥 Khudjakov 2007			 Chukchi Thodeman 1996			 福島八幡山 櫻穴墓

表1-2



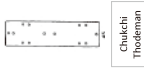

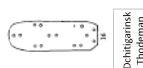


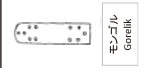


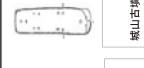

	ヨーロッパ	内陸アジア	モンゴル	中国(長城より南)・チベット	シベリア	沿海州、サハリン	韓半島	日本
Type B-4 ABabC6@2							 ソウル善林寺城 香炉小札	
type B-5 ABabCcd@2		 Gonburuv, Altai 左a 右b						
type B-6 ABabCDcd@					 Chukchi Thodemman		 愛宕石磁器 茶永・伊東	
Type B-7 ABabCDcdE@2					 Dchiligaïmsk Thodemman			
Type C ABab@CDcd@		 アルタイ Gonburuv						
type C-2 AB@abCcd@2		 アルタイ Gonburuv						
type D-1 ABabcd@			 モンゴル Gorelik	 二十家子 楳		 鉄騎 Derechinsk, E.		 鷹ノ木 沖ノ島 清水  城山古墳

表 1-3


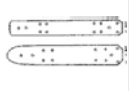



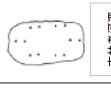


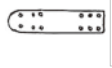

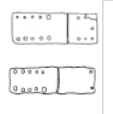

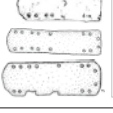


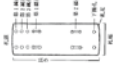
	ヨーロッパ	内陸アジア	モンゴル	中国(長城より南)、チベット	シベリア	沿海州、サハリン	韓半島	日本
type D-2 このタイプは、 挂甲の胴部くび れ部か、 ABabcdC@2-3					 トクロー アジコフ			 播磨八幡14号腰穴鑑出  近藤  千葉縣水更 津 紙田大塚山古墳
type D-3 ABabcd								
Type D-4 ABab@2				 河北省藁城 北齊  吉林省梨樹縣 涼陘前漢墓		 ポリンエ テレドヤンコ  ポリンエ テレドヤンコ		
type D-5 ABabcdC@								
type E abcde@2			 アフリアフ モンゴル, Gornik					 千葉縣 法皇塚
type E-2 abcdefg@2				 左、陸奥津島聖徳部 右、遠東五女山城		 女真 シャイギンスコエ アブコロスコエ シャーフカ  蘇杭 左から シャーフカ コルアコフスキー アレドヤンコ  ニート Schrenck	 仙田昌幸松原 兼野	 秋田城 伊藤
type E-3 abcdefghij@3								

表1-4



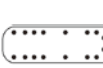

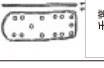

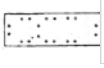

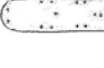
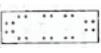




	ヨーロッパ	内陸アジア	モンゴル	中国(感城より南)・チベット	シベリア	沿海州、サハリン	韓半島	日本
type E-4 abcd@2.3						 朝鮮 テレビヤンコ	 千葉 押島寺山古墳	
type E-5 abcdefg@2						 朝鮮 テレビヤンコ		
type E-6 abcde@3								 千葉 塚山1号墳
type F-1 abAcde@3								 千葉 押島寺山古墳
Type G A2abB2@2				 河北 郭精城				
type G-2 [中軸孔(腋孔と下指孔)が複数] A2abB2cdef@2			 フフホト出土 馬、鹿					
type G-3 (中央に一個の軸孔) A2abBcdCD@2	 庫拉薩 Khudjakov				 トクワ フジヤコフ			

表 1-5

	ヨーロッパ	内陸アジア	モンゴル	中国(長城より南)・チベット	シベリア	沿海州・サハリン	韓半島	日本
type C-4 A2B2abcdeFG2@ 2			 アがト出土 馬、漢					
type H-1 大鏡並札 a/2bcdef@2							 仲部遺跡	
type H-2 樺太アイヌ鏡 abcdef@5					 系糸・伊東			
type H-3 樺太アイヌ鏡 a/2bcdef@5					 系糸・伊東			
type H-4 樺太アイヌ鏡 a/2bcdefgh@2					 系糸・伊東			

① 威穴、綴孔、覆輪孔等の名称は、津野二による。② 小札孔の配置を参照するために、中軸孔には大文字ABCを使用し(二個一列の場合はA2B2のようにあらわす)、面刃孔には、小文字abcを使用する。片側に一個しかない場合は、a/2のようにあらわす(大鏡の小札のよな場合)。下刃孔(下輪孔)は@であらわす。③は、突起を意味する。その並びは、上部からの順番を示す。引用文献 劉永賢 2003『中国古代軍戎服飾』上海古籍出版社。Шабанов, В.З.(Schabunov, V.E.) 1993 "Вооружение чжурчженей XII—XIII вв.". Далекий Восток. Schenck, Leopold von. 1891 "Reisen und Forschungen im Amur-Lande in den Jahren 1894—1896 im Auftrage der Kaiserl. Akademie der Wissenschaften zu St. Petersburg. Band III Zweite Lieferung. Die Völker des Amur-Landes. Ethnographischer Theil. Erste Hälfte. St. Petersburg. Горелик, М.В. 1987 "Ранний монгольский доспех (8-пцирные пластины туркского типа). Этнография и антропология Монголии". Новосибирск. Наука. 初編モンゴルの鏡(9-14世紀前半)163-207. Горбунов, В. 2004 "Панцирные пластины туркского типа". Древности Алтая. Барнауль. http://e-ib-gasuru/da/archive/2004/12/12.html. Худяков, Ю.С. 2007 Золотая волчья голова на боювых знаменах. Оружие и войны древних тюрок в степях Евразии. Издательство Петербургского Востоковедения. Санкт-Петербург. 千葉県の歴史資料集第4(遺跡・遺構・遺物)県史シリーズ12(11)武具。田中晋作 1990 『武具』、『古墳時代の研究8古墳II副葬品』、39-55。中国社会科学院考古研究所古科技实验研究中心、白荣金、王彩伊 1986 『鞏南出土的北朝铁甲胄』、考古第一期22-35。朱永雅、伊真、信雄 1974 『挂甲の系譜』。Деревянкo, E. И.(Derevianko, E.I.) 1987 "О черки Военного дела Племени Приамурья". 服装史 2006 『中国伝統工芸全集・甲冑復元』。服装史 2008 『中国伝統工芸全集・甲冑復元』。 the Battle of Wisby 1361". Thorndeman, B. 1939 "Armour from

表 2-1 小札タイプと編年 (縮尺不動) Table 2 Chronology of lamellar types : not to scale

① 緘穴、綴孔、下綴孔、覆輪孔等の区別は、津野仁による。② 小札孔の配置を表現するために、緘孔などの中軸に配置された孔には大文字 ABC を使用し(二個一列の場合は A2B2 のようにあらず)、綴孔などの小ざねの端に近い孔(両辺孔)には、小文字 abc を使用する。どちらかに偏って一孔がある場合には a/2 のように表す。下綴孔などの小ざねの下端にある孔は @ であらず、複数の場合には穴数を加え @2 のようにあらず。Ⓜは、突起を意味する。その並びは、上部からの順番を表現し、- は小札行間が開いていることを示す。

小札孔 構成記号	Type A、上部の緘孔が一個(A-5は、上部中軸孔が二個一対)					Type B、上部の緘孔が二個					
	type A-1 AabBcd@2	type A-2 AabBcdC@	A-3 AabBcdCef@2	A-4 AabB@2	A-5 Aabcd@	type B-1 ABabC@2	type B-2 ABabCcd@2	type B-3 ABabCcdD@or@2	type B-4 ABabCc@2	type B-5 ABabCcd@2	type B-6 ABabCDcd@
タイプ Types											
年代 Years	1500										
1000											
500											
0											
-500											
-1000											
-1500											

ヨーロッパ
Europe

内陸アジアと
モンゴル
Central Asia
and Mongolia

中国
チベット
China and
Tibet

北東アジア
朝鮮半島
沿海州
Northeast Asia, Korean
Peninsula, Maritime

























日本
Japan

表 2-2

① 織穴、綴孔、下揃孔、覆輪孔等の区別は、津野仁による。② 小札孔の配置を表現するために、織孔などの中軸に配置された孔には大文字 ABC を使用し(二個一列の場合は A2B2 のようにあらわす)、綴孔などの小ざねの端に近い孔(両辺孔)には、小文字 abc を使用する。どちらかに偏って一孔がある場合には a/2 のように表す。下揃孔などの小ざねの下端にある孔は @ であらわし、複数の場合には穴数を加え @2 のようにあらわす。ⓐ は、突起を意味する。その並びは、上部からの順番を表現し、- は小札行間が開いていることを示す。

小札孔 構成記号	① 織穴、綴孔、下揃孔、覆輪孔等の区別は、津野仁による。② 小札孔の配置を表現するために、織孔などの中軸に配置された孔には大文字 ABC を使用し(二個一列の場合は A2B2 のようにあらわす)、綴孔などの小ざねの端に近い孔(両辺孔)には、小文字 abc を使用する。どちらかに偏って一孔がある場合には a/2 のように表す。下揃孔などの小ざねの下端にある孔は @ であらわし、複数の場合には穴数を加え @2 のようにあらわす。ⓐ は、突起を意味する。その並びは、上部からの順番を表現し、- は小札行間が開いていることを示す。										
	Type B、上部の 綴孔が二個	Type C、小札に突起ⓐが付く			Type D、中央の綴孔が無い					Type E、綴孔、綴孔が全て二個一対で端に位置する	
タイプ											
	type B-7 ABabCDcdE@2	type C-1 ABabⓐCcd@	type C-2 ABⓐabCcd@2	Type D-1 ABab-cd@a1~3	type D-2 ABab-cdC@2	type D-3 ABab-c@2	type D-4 ABab@2	type D-5 ABabC@	type E-1 abc-de-@2	type E-2 abcde-fg@a1~3	type E-3 abcde-fgh@2
1500											
1000											
500											
0											
-500											
-1000											
-1500											

表2-3

小札孔 構成記号	①緘穴、綴孔、下揃孔、覆輪孔等の区別は、津野仁による。②小札孔の配置を表現するために、綴孔などの中軸に配置された孔には大文字 ABC を使用し(二個一列の場合は A2B2 のようにあらわす)、綴孔などの小ざねの端に近い孔(両辺孔)には、小文字 abc を使用する。どちらかに偏って一孔がある場合には a/2 のように表す。下揃孔などの小ざねの下端にある孔は @ であらわし、複数の場合には穴数を加え @2 のようにあらわす。③は、突起を意味する。その並びは、上部からの順番を表現し、- は小札行間が開いていることを示す。											
	Type E、綴孔、綴孔が全て二個一対で端に位置する			Type F、Eの中央に綴孔がつく	Type G、中軸孔(綴孔)が二個一対になる				Type H 大鑑、アイヌ鑑			
タイプ												
	type E-4 ab-cd-@2`3	type E-5 abcd-e-f@2	type E-6 ab-cde-@2`3	type F abAcde@3	Type G A2abB2@2	type G-2 A2abB2cdef@2	type G-3 A2abBcdC@`@2	type G-4 A2B2abcdefC2@2	大鑑 H-1 a/2bcdef@2	樺太アイヌ鑑 H-2 abcdef@5 H-3 a/2bcdef@5	樺太アイヌ鑑 H-4 a/2bcdefghi@2	
1500												
1000												
500												
0												
-500												
-1000												
-1500												